慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワイマル共和国の診断書 : ハインリヒ・マンのエッセイ集『七年』について
Sub Title	Die Diagnosen der Weimarer Republik : Über Heinrich Manns Essays ,,Sieben Jahre"
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.20 (2003. 3) ,p.111- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20030331-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ワイマル共和国の診断書

——ハインリヒ・マンのエッセイ集『七年』について——

坂口尚史

緒言。ワイマル共和国におけるハインリヒ・マン

ワイマル共和国時代（1919-33）の1925年、トーマス・マンは兄ハインリヒについて次のように書いた。「すべてのドイツの詩人たちのうち、ハインリヒ・マンは最も社会的であり、社会的—政治的な衝撃の人である。西ヨーロッパ、とくにラテン民族の領域では並外れた存在ではないが、我々ドイツにおいては比類ない存在だ。」

1910年にハインリヒは、「精神と行為」、「ヴォルテール・ゲーテ」をはじめとする文化的、政治的なエッセイを発表し、自由と民主主義の理想をドイツで実現しようとする態度を打ち出した。つまり、自らが育った、ビスマルクやウィルヘルムⅡ世のドイツ帝国に反対する立場を表明したのである。そして第一次世界大戦勃発時には、弟トーマスをはじめドイツ帝国を擁護しようとする多くの保守派と対立した。このいきさつについては、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』（1918）の中で詳細に述べられており、トーマスによって「文明の文士」とよばれた存在こそ、名は明かされていないが、兄ハインリヒであった。

第一次世界大戦が終り、ドイツ帝国はワイマル共和国という政治体制をとることになり、ここにドイツ史上初の共和国が誕生した。そしてこの共和国で最も有名な文化人の一人だったのがハインリヒ・マンであり、デモクラシーを賛える最初のドイツの文学者の栄光を担っている。その名声は弟をしのいでいたとさえ思われるのである。ウィルヘルムⅡ世時代のドイツを批判的に描いた小説『臣下』（1918）と、それに続く三部作は、帝国告発の書であった。さらに『権力と人間』（1919）にはじまるエッセイ集

が、6冊刊行されている。[1)]

本稿においては、1929年に刊行された、『七年』と題するかなり大きいエッセイ集から、ワイマル共和国時代のテーマを選び出した。七年とは1921年から1928年までの七年間をさしており、共和国における著者の発言の記録であるが、評論集というよりは時事論であり、新聞や雑誌に発表された文をまとめたもので、「思想と事件の編年記録　1921-1928」(Chronik der Gedanken und Vorgänge) という副題がつけられている。

第一エッセイ集『権力と人間』との相違

ワイマル共和国の冒頭に発表された『権力と人間』は、クルト・アイスナーに対する弔辞を収録している。ミュンヘンの「レーテ革命」を無血で成功させたバイエルン首相は、ハインリヒ・マンが最も深い共感と大きな信頼を寄せていた人物であった。1914年に設立されたBundes Neues Vaterlandのメンバーの一人であって、平和運動の啓蒙を目標としており、やはりメンバーであるウィルヘルム・ヘルツォークやルネ・シッケレの発行する雑誌Das ForumやDie Weißen Blätterはこの同盟の啓蒙活動の中心であった。ハインリヒの「ゾラ論」はDie Weißen Blätterに発表され、フランスの作家を語りながらドイツの現状を批評した内容であった。この同盟はすでに第一次世界大戦中から、対立していた左翼の芸術家やインテリ層を統合しまとめるという役割をもっていた。ドイツ皇帝が退き、ドイツがどのような国家体制をとるのかまだ決っていなかった1918年11月に、民主主義を推進しようとする労働者や兵士たちによって、「レーテの精神をもつ労働者の政治評議会」が結成され、ハインリヒ・マンが議長に選出された。

そして、ハインリヒによって、「あらゆる精神的な職業をもつ人々からなる同志」に向けて宣言が起草された。その内容は1848年の革命における民主主義の精神を基盤としたヨーロッパ的な視野に立っており、穏健な市民的なものであった。

「我々はドイツの民主主義者である。我々の誇りは1848年の（精神の）継承であり、我々の世界はドイツ理想主義の世界であって、ビス

マルクやトライチュケの精神世界ではない。」[2)]

このように述べて、なによりもまず君主制を打倒し、軍部支配を排除することをめざした。国民の指導者は大ブルジョワ層ではなく兵士層と労働者層から出なければならない。しかし、ドイツの革命的大衆は、即座に社会主義を欲したのではなく、ヨーロッパ大陸の指導理念にそった民主主義社会をめざしていた。ハインリヒ・マンはこのようなクルト・アイスナーの「レーテ評議会」を支持した。彼のプログラムは民主主義を基礎にした「革命評議会」（レーテ）の受容であった。

だが、アイスナーは1919年2月21日に、ナチス党の青年によって暗殺された。非業の死をとげた友人のために、ハインリヒは3月16日ミュンヘンのオデオン広場で追悼演説を行なった。このときの文章がエッセイ集『権力と人間』におさめられたのである。彼はアイスナーの中にドイツの民主化をめざす知的インテリの姿を認め、「アイスナー政府の100日間は、これまでの50年間よりも多くの理念、理性の喜び、精神の活性化をもたらした」と評価している。

さて、実現したワイマル共和国は果たしてどのような共和国だったのだろうか。共和国でありながら共和主義者（Republikaner）の少ない、国民によってしっかりと維持されなかった共和国であった。エッセイ集Sieben Jahreはその共和国の診断書であるといえよう。この大きな本の中には、1921年末から1928年末までに発表された、さまざまの新聞コラム、講演文、時事論、作家についての回想などが多数おさめられている。それらすべてをとりあげるのには紙面が不足しているので、1923年、1928年の章から以下に述べるエッセイを取りあげてみよう。これらの文章からわかるのは、第一エッセイ集が共和国のあるべき姿を述べているのに対して、共和国のあり方に対する深い憂慮が示されていることである。アードルフ・ヒトラーのナチス党（NSDAP）は次第に影響力を増してきていた。それはトーマス・マンが論文「近代精神史におけるフロイトの位置」（1929）で指摘した時代の精神的状況とも一致している。[3)] ドイツ・ファシズムおよびこれを支援する思想は、「血と大地」「種族」のような諸原理を強調しつつ、理性と精神を軽んじ、過去の古いもの、本能的なものをまるでそれら

が新しい思想であるかのように宣言してきていた。ハインリヒ・マンの世相に対する見方にはトーマス・マンとも共通した視点が認められる。

「1923 年の悲劇」について

ワイマル共和国にとって 1923 年は、危機的状況に陥っていく徴候が多く見られた年であった。フランス軍がルール地方を占領し、ドイツは受動的な抵抗の姿勢で対応していたが、それについてはさまざまな議論があった。ラインラントやプファルツにおいては強い中立主義の運動が起り、チューリンゲンやザクセンでは帝国軍が左翼の蜂起に備えて行進していた。そして 11 月にはミュンヘンで、ヒトラーによる極右勢力がベルリンの政府に反対を唱えてクーデターを起こそうとして、失敗に終るのである。

ハインリヒ・マンは、彼が 1910 年以来主張しつづけてきた共和国という国家形態が、実現したものの欠陥にみちたものであり、理想とはほど遠いことをますます強く認識せざるをえなくなってきていた。この理想と現実との間の緊張関係が、エッセイ集『七年』のほとんどすべてのエッセイに書き込まれているといてよいであろう。中でも特に重要とみられているのが、「1923 年の悲劇」(Die Tragödie von 1923) と題された全 6 章からなるエッセイ集である。5 番目に収録されている、「我々は憲法を祝う」は、1923 年 8 月 11 日に、ドレスデンの国立劇場で行なわれた講演であり、16 日付の Sächsische Staatszeitung に掲載された。

聴衆に対するよびかけのあと、この講演の基調が示される。—「私たちは憲法を称賛しなければなりません。しかし憲法が発布されてからこのかた、憲法から何が生まれたのかを知らないのです」と。1919 年 8 月に新憲法が公布されてから 4 年が経過していたが、当時「世界で最も民主的」といわれたワイマル憲法はどうなったのか。この憲法は国民主権を明記し、人身の自由、集会・結社・表現の自由などの古典的な自由権だけでなく、労働権、生存権などの幅広い社会的基本権を定めていた。しかしながら、共和国に対する幻滅は、講演中の次のような箇所によく表れている。

「フランスによるルールへの侵入は、いかなる意味でも苛酷であり、決してほめられたものではありません。いかなる人にとっても賞讃の

心が起きない前史があるにしてもです。しかし、ルール侵入以来またドイツにおいてナショナリズムが起ってくるとすれば、我々は次のことをあきらかにしたいと思います。つまり、ナショナリズムとルール侵入の責任は誰にあるのかということです。それは不正に蓄積された資本にあるのです。人間愛と同じようにみなされる、本当の祖国愛は、思慮分別を必要とし、合法性を必要とします。しかし、不正と破壊の中にナショナリズムが育ってきているのです。」[4)]

大資本家や発展してきた資本主義が、共和国の発展にとって障害となり、とくにドイツの矛盾にみちた資本主義が陥ってしまった、外国との経済関係のもつれがナショナリズムが興ってくるきっかけを与えてしまったとの認識がある。ひょっとして、ハインリヒ・マンは共産主義にかなり近づいているのかもしれない。というのも、「ナショナリズムは、まず所有の平等性を拒否してしまった我々の弱さの産物」であるという発言が見られるからである。社会的な、平等性をもった民衆の国のかわりに、金権政治、富豪の支配が起こり、「経済の封建主義」が共和国の中に力をのばしはじめていた。

ハインリヒ・マンが敬意を払ってきたフランスもまた弱点をさらけ出していた。ルールへの侵入はあきらかな暴挙であって、「フランスは自由の感覚の弛緩に苦しんでいる」のである。事態を冷静にみつめようとハインリヒは聴衆に訴えかけ、ナショナリズムが強くなりすぎることを警戒している。しかし、ワイマル共和国には、ワイマル憲法の精神に反するできごとがおこりつつあった。

資本主義的な経済秩序が優勢になってきたことはハインリヒ・マンの感覚によれば、また新たな物質主義への後退であった。共和国政府のインフレ対策は、シュティネスのような株の相場師を生み、巨額の金をもうけさせていたが、その一方において、一般の生活水準が下る結果を招いていた。

「1923年の悲劇」の第Ⅱ章は、「『経済』1923年」と題されているが、19世紀後半からのドイツの歩みを、君主制や軍国主義から、民族主義や反ユ

ダヤ主義、祖国愛などの話も含めて述べている。この文は講演ではなく、「プラハ日刊新聞」に最初一部が発表され、「新ドイツ展望」1923年7月に全文が出た。

とくに注目すべき箇所は、独仏の関係を回顧し、ドイツの支配者層と経済の関係について述べた文であろう。少し長くなるが、その部分を紹介してみよう。

> 「ドイツと、そして疑いもなくフランスも第一次世界大戦が終って以来、双方の民族主義的な市民階級に手をやいてきたということ、このことは恥の限度を超えている。欺瞞と武力をかわるがわる使いながら一方が相手国民を弾圧し、さらに大きな不幸へとおとしいれた。戦争の法則に従うために双方の国民の長年にわたる習慣が利用された。自由を戦争というさらに徹底した形で廃止するためである。国民の疲労と精神的な打撃を両国は金をもっている階級の犠牲にしたのだ。今だれもがわかっているのは、戦争というのは一部のエリートにとって最も確実な手段だったということなのである。支配階級にはもはや市民気質はもうつき従っていかず、最も貪欲な人たちの濾過された本能が膠着している。彼らは中産階級を食いものにしてしまった。彼らのところへのぼっていく社会的な段階はみんな取り除かれた状態である。彼らの下には広範囲におよぶプロレタリアートがいるのである。上にいる連中だけが、民衆の血をすい上げており、下の人たちはいつも大変な苦労をしている。あわれみの心をもたない、貪欲な人たちがいるのだ。」[5)]

この文章は、ワイマル共和国の現状についてハインリヒが下した診断書のうちでも、重要なものの一つである。しかし支配者層だけが悪く、搾取をつづけていたのであろうか。否である。被支配者層にもまた責任があった。「精神的な労働者は、反抗の声も上げずに飢えるかまたは事務所の召使いになろうとしたようにみえる」[6)]という。ハインリヒによれば、労働者たちは羊のように大人しく支配者層に従ってしまった。

労働者たちとの関連において、重要なのは知識人の状況である。「1923

年の悲劇」の第Ⅰ章は、「精神的な階級の死滅」と題されている。経済的な中産階級の没落とともに、精神の守護者たるべき作家、知識人が力をなくしてしまった。「我らだめにされた者たち」と、作者は自嘲的に述べている。

> 「我々だめにされた者たち（wir Zugrundegerichteten）は、仮に我々が貧しい生活以外に何も代表しないとしても、声高くはっきりと話す権利を、本来ならばもっているはずである。手短かにつよく言うならば、我々は鉱山や工場よりももっと大切な、かけがえのない諸価値を代表しているのだ。今まで体験したことのない、童話めいた財産や、我々の死をすぐさま認める経済などはスキャンダルにすぎない…そして経済が、思想の貧困、思想への敵意が充満するなかで全体をまとめるただ一つの概念なのだ。」[7)]

「童話めいた財産」とはインフレによる物価の高騰をさしており、1923年1月にはまだ1800マルクだった、三ヶ月分の雑誌購読料は6億マルクにも達していた。「思想への敵意」は文化の崩壊を意味する。この危険きわまりない時期に、権力に対する精神の二律背反的な関係が発生しはじめていた。

精神の危機を感じとったハインリヒ・マンは、ときの首相グスターフ・シュトレーゼマンに公開質問状を送り、その内容が1923年10月11日付ベルリンのVossische Zeitungに掲載された。それが「1923年の悲劇」第6章の「あなたは裏切るまでに至る」である。ハインリヒはここで、左翼知識人の主張をもう一度くり返している。エッセイ集「精神と行為」（Geist und Tat 1923）とよく似た内容であり、「理性の独裁」（Diktatur der Vernunft）を達成せよとの要求である。「暴力の独裁」に従っていけば、危機は再び訪れる。そしてドイツ帝国は滅びる。ハインリヒはここで、「共和国」とはいわないで、「帝国」[8)]と言っている。1871年以来のdas Reichという言葉はまだ生きていた。首相に向かってハインリヒはまず問いを発している。—「あなたはこの状況に耐えることができますか？ 国民はまだ長く危険にさらされていることにこれ以上耐えられないでしょう。そうなればあな

たは、ご自分と帝国を失うことになるでしょう。それを防いで下さい！」—

シュトレーゼマン首相からハインリヒは、政治的な決断を期待した。自国における精神的、道徳的な面の回復を求めた。具体的には、フランスのポアンカレ首相と会談して賠償金問題を改善し、右翼に対する報道制禦策を講じることなどを求めた。最後に首相に対して次のように訴えている。—「あなたはたくさんの裏切り者たちによって毒されることから革命を奪いとることを考えていなかった。国家が革命の総括であるために。しかし事態は毒されてしまった。私もまた、自分が独裁を要求することになろうとは考えていなかった。私は理性の独裁を要求する。帝国の、ドイツ帝国とその権利の信奉者をよりどころにして下さい！」と。[9]

「短かい思案」（1928）について

ワイマル共和国に対する憂慮が、エッセイ集『七年』のいたるところに見られることはすでに述べた。次にとりあげるこの小文は、初出が不明とされているが、1928年の項目に収録されている。この文はしかし、少し他の文と異なる点が二つある。それは共和国を、自分の少年時代であった1880年と比較して考察している点、およびこの共和国をさらに発展していく時代の前の過渡期であるとみなしている点である。

「今日想像できる最も悪名高き概念の一つは、『1880年の婦人』である」というおもしろい書き出しで始まり、「その婦人はひどく不器用で悪趣味であり、要求が多いのだが、自分自身は世才に乏しい」[10]との特徴が示され、立派な子孫は期待できないという。そして、1928年現在生きているすべては、1880年とは対照的であり、科学技術も段違いに進歩しているし、48年前にはなかったスポーツも盛んだ。長いドレスを着て足の先しか見えていなかった服装は全くかわり、体型が完全にみえるようになっている。若い人たちは、愛がもう役割を終えたなどと話しあわなければいけない、などドイツにおける世相の変化を紹介している。これらの世相の比較を出すことがこのエッセイのまず第一に挙げるべきテーマである。とくに若い世代のあり方などを比較しているのが興味深い。

今日からみて悪名高い1880年は、ハインリヒの判断によれば、「長い、成果の多かった、そしてその後間もなく終った世紀、すなわち市民時代

(Bürgerzeit) の最後の年」[11] なのであった。市民時代が終ったあとに、ドイツ帝国が推進した帝国主義の時代がやってきた。1880年以前に存在した「市民時代」がよかったということ、そのことは当時まだ活躍していた「精神世界」の巨人たち、イプセン、ゾラ、トルストイ、ニーチェによって意識されていた。1928年現在、かつての精神世界の巨人はもういない。それは大変残念なことであり問題でもある。何よりも現在生きている人間には「道徳的なもの」(das Sittliche) が欠けていると、そのように著者は、過去のよき19世紀の市民時代とその文化をなつかしんでいるようにみえる。

しかし、今57歳になったハインリヒは、1928年の世相に全く絶望しているのではない。「新即物主義」とよばれているその時代は、著者によってどのように見られ、どの点を補強すれば将来につながると考えられているのであろうか。このエッセイ集に収録された、「若い人々」(1925) をみても、若い世代に対するあたたかい姿勢が感じとられるように思う。ドイツは第一次世界大戦に敗れた。かつてドイツ国民が体験したことがなかったこの大きな破局のあとに新しくスタートしなければならなかった世代は、1880年代にあったような道徳的な問題に悩む必要がなくなった。物質的なものをたてなおすことが最も大きな関心事であり、科学技術の進歩に自分を合わせていかなければならないこともよく理解できる。アメリカの文化もたくさん入ってきた。さまざまな異質なものが受け入れられてそのあとにできてくる道徳的なものは、かつての市民時代のようなものではなく、この時代にふさわしい道徳とならなければならない。

では、そのような道徳はどのように生れるのであろうか。そのためにみんなが努力し、一生懸命に働かなければならない。物質が多く入って大いに混乱が生じたあとに、人間としての良心あるいは、あるべき正しい姿が人々の心にできてほしい。「1928年の世代はその生活を正しく過している。後代はこの世代に対して、冷静にしかも批判的でない態度でよい成果が上ることを、またこの世代の驚くべき『ダイナミズム』のためにあらゆる道徳的なものに全く無関心であり根底において感動的なほど無実であったことを、証明してやることができるだろう。多くのことを改革しなければならない世代の人間はこのようにみえる。この世代の態度はいつか、世界を

再び礼儀正しくし、責任感あふれる人々にとって住みやすくするような結果を出すだろう。それぞれの世代は最後には、自らの本質の正反対に到達するのだ。」[12] これがハインリヒ・マンがワイマル共和国の若い世代に下した希望的な観測であった。少なくとも1920年代のエッセイには、現実に対する道徳的な責任感が生れることを期待していたようである。後代からみれば、ハインリヒの期待感は甘いものであり、先に引用したトーマス・マンの1929年の論文「近代精神史におけるフロイトの位置」にみられる診断の方がより一層きびしく現実をみていたようにも感じられる。

この時期にハインリヒ・マンが発表した小説には、若い人を導くモラリストのような人物がよく登場する。その一例として、1928年に発表された長編『ウージェニーまたは市民時代』を挙げたい。エッセイ「短かい思案」とこの小説には共通のテーマがあり、小説はむしろこのエッセイの主旨を拡大して発展させたような感じを与える。

この小説のタイトルにあるウージェニーはフランス皇帝ナポレオンⅢ世の妃であり、1873年1月に夫君を失なったがまだ存命であった。そのウージェニーによく似ている、領事ヴェスト夫人ガブリエレがこの小説のヒロインであり、物語は1873年に設定されている。ヴェスト領事はリューベックに住む市の名士であり、妻ガブリエレはフランスのボルドー出身で、まだ若い。作者は、ヴェスト領事夫妻を「市民時代」の人としてとらえている。「末期の」没落に近づいた市民時代である。このタイトルには当然それに対応する「皇帝の時代」(Kaiserzeit) が考えられていることは明白である。1873年はドイツにおける経済危機が始まろうとする頃であった。いわゆる「泡沫会社氾濫時代」(Gründerzeit) であり、フランスからもたらされた何十億マルクもの収入によって、資本主義が不健康な飛躍を成しとげた結果70年代の終りまで経済上の危機が続いたのである。それはプロシャとフランスの戦争の結果がもたらした状況ではあったが、作者は第一次世界大戦後のいわば逆の状況の中に、55年前の舞台を設定したといえよう。

ヴェスト領事夫妻の幸福をおびやかす存在として登場するのがユダヤ人のピドーンである。彼は株の相場師であり、株式市場で儲けてはいたがい

つも「破滅の危機にさらされている」男であった。ヴェスト領事はピドーンの誘惑にのって不正な株に手を出して失脚しそうになるのだが、危うく難をのがれる。ピドーンの危険性に気づき、作者の分身ともいうべきモラリストの役割を演じるのが、フォン・ハイネス教授である。この人物は、この時期の他の小説『まじめな人生』(1932) の刑事キルシュや、『大事件』(1930) の技師長ビルクと同じように、若い人々を正しく導こうとする存在なのだ。この小説は、19 世紀の市民時代への郷愁がテーマなのではなく、第一次世界大戦後のドイツ市民社会のあり方を問いかけているとみることができる。

ワイマル共和国においては議会制民主主義がその基本となっていくはずであったが、たび重なる経済上の打撃をうけた国民は次第に民主主義を放棄して、再び「権力」にたよろうとしていた。また若い世代の行動は、非難するにはあたらないとしながらも、もう一つたしかなモラルが欲しいとハインリヒは考えている。そのためには「精神の人」がドイツの若い人たちに刺激を与えなければならない。1915 年の「ゾラ論」以来、die moralische Aufgabe des Schriftstellers が小説においてもエッセイにおいても、ハインリヒ・マンの中心課題であった。

ハインリヒはワイマル共和国が健全な発展をとげるように力を貸したい、そのためには将来への発展への芽をつみとりたくない。そのためには現状からなんとかして肯定的なものをひき出したいと試る。若い人たちは、新即物主義の世の中で、成功や幸福を考え、ジャズ音楽に夢中になったりしている。若い人たちの生き方をながめつつ、彼らがよくなっていくための前提条件はそろっていると作者は考える。1880 年の市民時代は、すなわち自らの青春時代であるが、1928 年という時点からみると古くさい面をもつにせよ、依然としてお手本になりうる面ももっていた。伝統を失なった 1928 年のドイツに、19 世紀からよびかけている言葉が、エッセイ「短かい思案」をしめくくっている。それはその次にくるべき良い時代を期待していると読みとれるのである。原文をかかげる。

Dies sei gesagt, damit nicht ein Jahr wie 1880 immer weiter unbedacht mißachtet wird. Das Beste, was sich hoffen läßt, ist vielmehr, daß 1880 und

sein sittliches Geschehen sich in anderen Zusammenhängen später wiederholt.

1880年のような年がいつも軽率に軽くみられないためにもこのことが言われるべきだ。望みうる最上のことは、1880年とその道徳的なできごとが、別の関連性の中でのちに繰り返されることだ。

エッセイ集『七年』が1929年に出版された翌年、ローゼンベルクの『20世紀の神話』が出版され、ヒトラーのナチス党が若い人々をも含めて国民をひきつけていったことは、説明の必要もないだろう。この本の初版本は慶應義塾大学の三田情報センター（図書館）にある。Paul Zsolnay Verlag版である。小論では、1994年にFischer Taschenbuch VerlagからHeinrich Mann Studienausgabe in Einzelbändenの一冊として出た版を使用した。テキストが540ページ、「あとがき」と資料を含めると740ページの大冊である。

現在リューベックのHeinrich Mann GesellschaftのPräsidentをつとめるPeter-Paul Schneider氏の努力によるこのシリーズも26冊になったことは心づよい。しかし、今年から刊行が開始された注釈付のトーマス・マン大全集と比べても、ハインリヒ・マンのテキストはまだ完全とはいえない。エッセイ集『七年』はまだまだ奥行きが深く、研究されるべきテーマが数多くあり、今回はほんの一部の紹介にとどまった。最後にこの巻の「あとがき」を執筆したハンス・ヴィスキルヒェンによって引用されている、ヴィルヘルム・ヘルツォークの書評の一部を紹介しておきたい。原題はWilhelm Herzog: Geist und Tat Heinrich Mannsであり、発表誌はDie Literarische Welt, Berlin. Jg.5, Nr.32 vom 9. August 1929である。エッセイ集全体のテーマが巧みにまとめられた文であり、著者の紹介である。

「公的生活の、個々にはもはや理解できないほどの腐敗のまっただ中に、頭脳明晰にして動揺することのない、最高の批評家の頭脳をもった人、何物にも左右されない一人の男が立っている。ここに一人の人間がいる。その人は無秩序の時代に秩序を要求する人であり、虚言

の多い文士と胸をはる無教養の厚顔な尊大さの中にあって節度を保持する人であり、高度資本主義の思い上りに対して自分の精神の光る鋭い武器以外の何ものをも対抗させない人であり、まるで他の星からやってきた人のようにこの魔力を失なった世界を駆けぬけていく人なのである。」(2002年10月)

註

1) 『権力と人間』(Macht und Mensch 1919)、『理性の独裁』(Diktatur der Vernunft 1923)、『七年』(Sieben Jahre 1929)、『精神と行為・フランス人たち1780-1930』(Geist und Tat. Franzosen 1780-1930, 1931)、『公的生活』(Das öffentliche Leben 1932)、『超国民的なものへの信条告白』(Das Bekenntnisse zum Übernationalen 1932)の6巻である。『権力と人間』については、「ドイツ革命期(1918-19)におけるハインリヒ・マンのエッセイ」(1)(2)として日吉紀要『ドイツ語学・文学』第24号(1997)、第25号(1998)に拙論あり。1910年の「精神と行為」もここに収録された。

2) Erklärung des Politischen Rats geistiger Arbeiter, München vom 15.11.1918から引用。In: Waltraud Berle, Heinrich Mann und die Weimarer Republik, Bonn 1983, S.71-72.

3) Thomas Mann: Die Stellung Freuds in der modernen Geistesgeschichte (1929), Gesammelte Werke Band X, S.256-280. この中でトーマス・マンは「時代おくれのヒューマニズム」についてふれるとともに、若い人々についてこう述べている。

「若い人たちも老人くさい理念をかぎまわり、不敵で足ばやな行進のうちに、若者の歌を歌い、腕をローマ式にあげて敬礼し、そんな風にして彼らの魂の美しい情熱を浪費しつつある。」(S.273-274)

4) Heinrich Mann: Die Tragödie von 1923, V. Wir feiern die Verfassung, Rede. In: Sieben Jahre, Chronik der Gedanken und Vorgänge, Essays, 1994 Frankfurt am Main, S.134.

5) Heinrich Mann: Die Tragödie von 1923, II. »Wirtschaft« 1923 Mai 1923, S.102-103.

6) ibid.,S.104.

7) Heinrich Mann: Die Tragödie von 1923, I. Das Streben der geistigen Schicht, April 1923, S.89.

8) Heinrich Mann: Die Tragödie von 1923, IV. Sie gehen bis zum Verrat, Oktober

1923, S.139.

9) ibid., S.149.

10) Heinrich Mann: Kurzes Besinnen. In: Sieben Jahre, Chronik der Gedanken und Vorgänge, Essays, 1994 Frankfurt am Main, S.434.

11) ibid., S.435.

12) ibid., S.435.

（慶應義塾大学法学部教授）